わが足でたどる

庄内町肝煎▶山伏峠▶鶴岡市添川

清河八郎・回天の道

元気・まちネット企画

「文学散歩の旅」25人ロマン感じて

庄内町出身の幕末の志士、清河八郎が江戸を目指して家出したルートを、鶴岡市出身の作家、藤沢周平さんの小説「回天の門」の記述を手掛かりにたどる「清河八郎・回天の道～文学散歩の旅」が18、19の両日行われ、地元住民が復元した同町肝煎から鶴岡市添川に至る峠道を歩いた。

雄大な眺望が広がる展望台で写真に収まるツアー参加者＝鶴岡市

清河八郎は16歳だった1847（弘化4）年、学者になろうと家出して江戸へ向かった。「回天の門」によると、捜索をかわすために山に囲まれひっそりとした道を歩いた八郎は、肝煎から槙葉山に入り山伏峠を越えて添川に出た。

「文学散歩の旅」は東京のまちづくりグループ「元気・まちネット」（矢口正武代表＝戸沢村出身）が企画。「まちネット」は清河八郎が出奔した際の県内ルートを「回天の道」と名付け、去年9月と今年6月の2回に分けて踏査した。また庄内町の住民と協力し、肝煎から添川に抜ける峠道を復元した。

ツアーには県内外の25人が参加。初日は庄内町の清河八郎記念館で明治維新の魁（さきがけ）といわれる八郎に関する説明を聞いた後、山伏峠のウオーキングに挑戦した。約2・5キロの道のりを2時間かけてゆっくり登り、峠付近の添川側に広場が整備されている展望台に到着。庄内平野や鳥海山、月山、飛島などを望めるビューポイントで雄大な景色を楽しんだ。地元住民が芋煮とおにぎりを参加者に振る舞った。

神奈川県川崎市、大学生立原さやかさん(21)は「山道は少しきつかったけど山伏峠からの眺望が素晴らしかった。山桜の時季にまた来たい」と話していた。一行は鶴岡市の湯田川温泉に宿泊し、2日目は藤沢周平記念館などを見学。庄内の豊かな自然と歴史ロマンを満喫した。